筑波大学
University of Tsukuba

平成３０年６月２５日

報道関係者各位

国立大学法人　筑波大学

点を取るならディフェンダーとミッドフィルダー間のスペースを狙え！
～Ｊリーグとブンデスリーガのサッカー試合の分析比較～

研究成果のポイント

1. サッカーにおける Ｊリーグとブンデスリーガの攻撃様相の違いを調べるために、互いのゲーム分析を行いました。
2. サッカーにおいてはディフェンダー（DF）とミッドフィルダー（MF）間のスペースを利用した攻撃がサイド攻撃などと比べて得点や得点機会に繋がりやすいことを実証しました。
3. Ｊリーグでは、ブンデスリーガと比べると DF-MF 間を利用した攻撃が少なく、DF-MF 間でボールを受けた選手が攻撃方向へボールを運んでおらず、ボールを奪われることが多いことが明らかになりました。

筑波大学体育系　中山雅雄准教授、浅井武教授、大学院生の鈴木健介（人間総合科学研究科3年制博士課程）らの研究グループは、日本におけるサッカーのトップリーグであるJ1リーグ（JL）2015シーズンとドイツにおけるサッカーのトップリーグであるブンデスリーガ（BL）2015/2016シーズンを対象に、記述的ゲームパフォーマンス分析を行いました。これにより、DF-MF間を利用した攻撃は得点や得点機会につながりやすいことが示され、その有効性が実証されました。さらに、JLはDF-MF間を利用した攻撃の割合、DF-MF間でボールを受けた選手が攻撃方向へボールを運ぶ割合、DF-MF間でのプレー成功率が、BLよりも低いことが明らかになりました。

現代サッカーでは、相手チームに時間とスペースを与えないコンパクトな守備組織の形成が主流となっています。しかし、DF-MF間を利用した攻撃の有効性やDF-MF間に着目したJLの攻撃様相について検討した学術的研究は報告されていませんでした。

本研究では、JL2015シーズン10試合とBL2015/2016シーズン10試合の計20試合を対象に記述的ゲームパフォーマンス分析を行いました。その結果、以下のことが明らかとなりました。

①DF-MF間を利用した攻撃は、サイド攻撃およびその他の攻撃よりも得点や得点機会につながる有効な攻撃である

②JLはDF-MF間を利用した攻撃の割合がBLより低い

③JLはDF-MF間でボールを受けた選手がボールを攻撃方向へ運ぶ割合が低く、DF-MF間でのプレー成功率も低い

本研究の成果は、日本体育学会誌「体育学研究」にて2018年6月19日付で公開されました。

研究の背景

現代サッカーの守備戦術は、選手間の距離を縮めることでコンパクトな守備組織を形成することが主流となっています。そのため、ディフェンダー(DF)とミッドフィルダー(MF)との間のスペース(DF-MF 間)は非常に狭く、侵入した際には厳しいプレッシャーがかけられます。指導書等(たとえば、林、2011)では、攻撃時にこの DF-MF 間を利用することは得点や得点機会に繋がりやすいと記述されており、DF-MF 間を利用した攻撃は得点を奪う上で重要であると考えられています。それに対して、日本サッカーは、相手守備組織内での攻撃プレーに課題があるとされており、DF-MF 間を利用した攻撃が効果的に行えていない可能性があります。したがって、DF-MF 間に着目して J リーグと世界トップリーグの攻撃を比較し、J リーグの攻撃に見られる特徴を明確にすることには意義があると考えられます。しかし、これまでに DF-MF 間を利用した攻撃の有効性や、DF-MF 間に着目した J リーグの攻撃様相について言及した学術的研究は見られませんでした。

研究内容と成果

本研究では、日本のトップリーグである J1 リーグ(JL)とドイツのトップリーグであるブンデスリーガ(BL)を対象に、記述的ゲームパフォーマンス分析を行いました。

分析ではまず、各リーグにおいて攻撃の種類(DF-MF 間を利用した攻撃・サイド攻撃・その他の攻撃)と、得点および得点機会(シュート・ペナルティエリア(PA)内侵入)のクロス集計を行い、DF-MF 間を利用した攻撃の有効性(他の攻撃よりも得点や得点機会につながっているか)を検討しました。さらに、DF-MF 間に着目して、JL と BL の攻撃様相(プレーの方向や成功率など)の比較を行いました。

その結果、DF-MF 間を利用した攻撃はサイド攻撃・その他の攻撃よりもシュート・得点・PA 内侵入の割合が高く、得点や得点機会につながる有効な攻撃であることが明らかになりました。

また、JL は BL よりも DF-MF 間を利用した攻撃の生起率が低いことが示されました。この結果は、JL の DF-MF 間を利用した攻撃の割合が、BL より低いことを表しています。さらに、DF-MF 間でボールを受けた選手が攻撃方向へボールを運ぶ割合および DF-MF 間でのプレー成功率は、JL では BL よりも低いことが確認されました。これらのことから、JL は BL と比べると、DF-MF 間に侵入したとしてもボールを攻撃方向へ運んでおらず、ボールを相手に奪われてしまうことが多いと考えられます。

今後の展開

本研究で得られた結果から、今までサッカーの指導現場や指導書等で議論されてきた DF-MF 間を利用した攻撃の有効性が実証されました。このことは、サッカーを指導する上で、DF-MF 間を利用した攻撃の重要性を説くための根拠の一つになると考えられます。さらに、今後は本研究で明らかになった JL と BL の攻撃様相の違いを考慮したトレーニングやコーチングが期待されます。

参考図

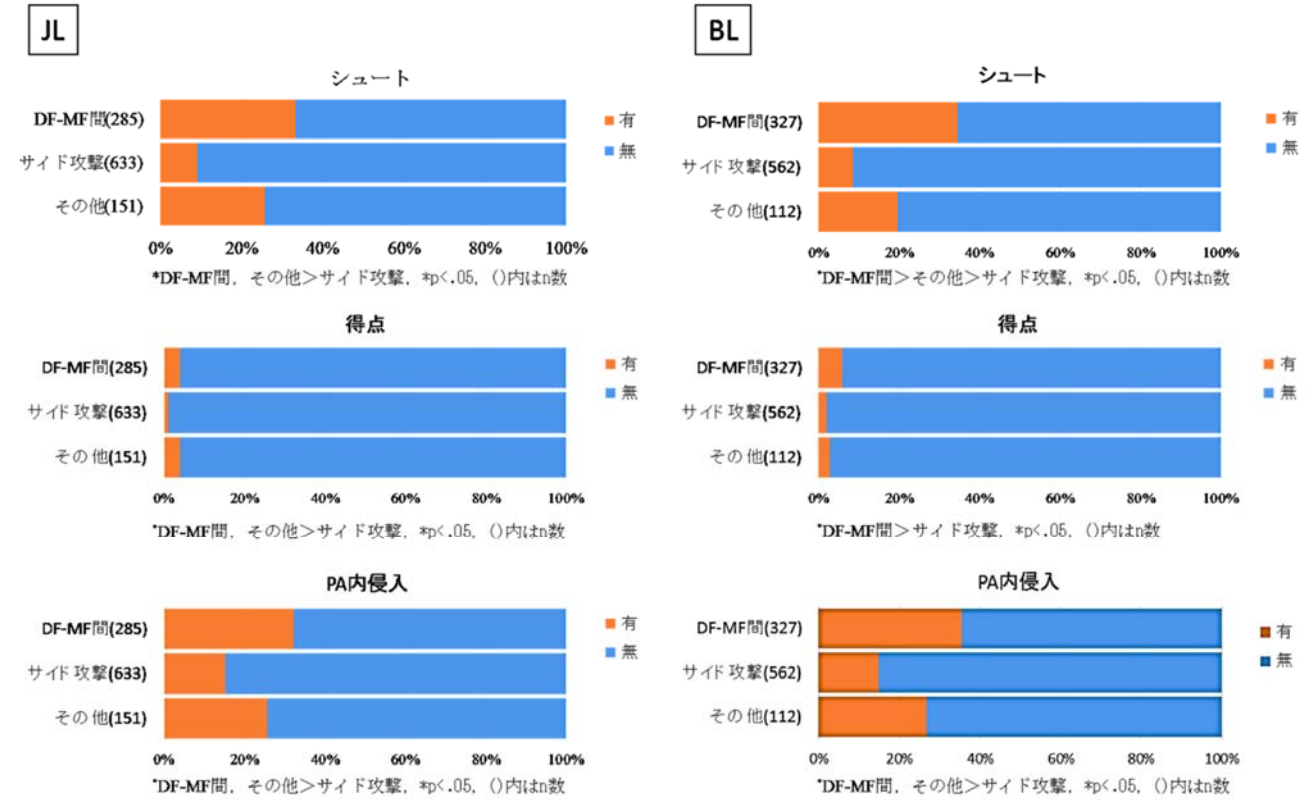

図 1. 攻撃種類と得点機会に関する項目のクロス集計。左図が JL、右図が BL のもの。JL・BL どちらにおいても DF-MF 間を利用した攻撃は、サイド攻撃およびその他の攻撃よりも得点や得点機会の割合が高いことが示されました。

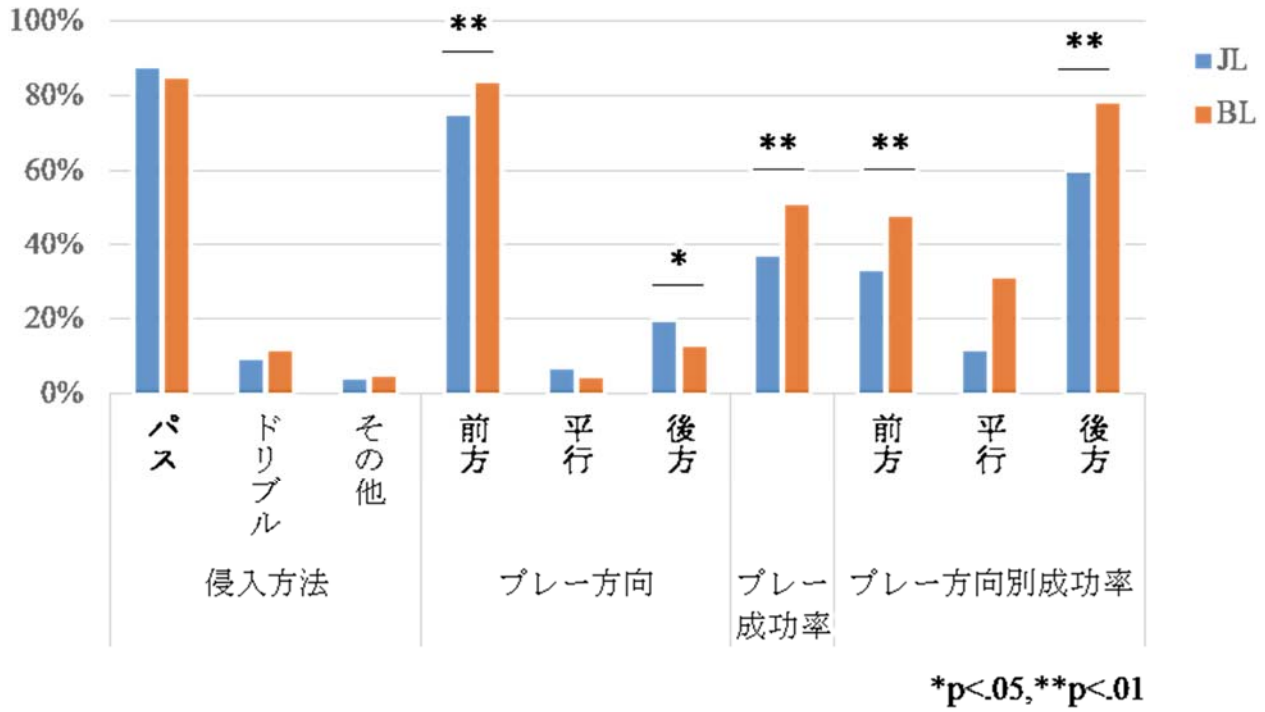

図 2. DF-MF 間でのプレーに関する測定項目の生起率および成功率の比較。JL は BL よりも DF-MF 間で受けたボールを前方へ運ぶ割合が低く、プレー成功率も低いことが示されました。

参考文献

林、2011．サッカー　ゴールを奪う攻撃戦術　得点するために，個人，チームは何をすべきか．株式会社ナツメ社．

掲載論文

【題　名】 サッカーにおける相手ディフェンダーとミッドフィルダーとの間のスペースを利用した攻撃の有効性の検討
および Jリーグとブンデスリーガにおける攻撃様相の比較

【著者名】 鈴木健介[*1]，浅井武[*2]，平嶋裕輔[*2]，松竹貴大[*1]，中山雅雄[*2]
*1 筑波大学大学院人間総合科学研究科、*2　筑波大学体育系

【掲載誌】 日本体育学会誌「体育学研究」
https://doi.org/10.5432/jjpehss.17137

問合わせ先

中山　雅雄（なかやま　まさお）
筑波大学体育系　准教授
〒305-8572　茨城県つくば市天王台 1-1-1